

1分スピーチに求められる「具体性」とは何か

— 問題解決型のスピーチの場合 —

工藤嘉名子

【キーワード】 1分スピーチ、「具体性」、問題解決型、スピーチの評価法、
中級レベル

1. はじめに

近年、企業では、真のコミュニケーション能力を備えた人材育成に力を入れており、その一環として「論理的に話す」「わかりやすく話す」力を養うための研修や教育が盛んである（大嶋2006、安田2007ほか）。その手法の一つに、1分スピーチ¹がある。1分という短い時間の中で情報を整理し論理的に話すためのトレーニングで、企業の朝礼や商談、報告など様々な場面に応用されている（齋藤2009、下地2011ほか）。日本語教育においても、数は少ないが、1分スピーチを口頭表現指導に組み込んだ実践研究（工藤・藤森2009a、2009b）や教材（黒崎2013）が報告されており、短い時間で論理的に話す力を育成しようという動きが見られる。

東京外国語大学留学生日本語教育センターの国費学部留学生予備教育課程（以下、1年コース）では、アカデミックな日本語力の養成という観点から「短い時間でまとまりのある話ができる²」という口頭表現能力を重視し、初級レベルから1分スピーチの指導を行っている。また、初級レベルと中級レベルの口頭表現試験の形式としても1分スピーチを採用している（工藤2011）。試験の評価は、内容・談話展開・デリバリー（話す速度、声の大きさなど）の3つの観点から設定された5段階の評価基準に基づき行われる。このうち、内容面の評価に関わる要素の一つに内容の「具体性」がある。しかし、具体的なスピーチとはどのようなもの

¹ 「1分間スピーチ」「1分間プレゼンテーション」などの名称があるが、本稿では、1分程度で話す活動を「1分スピーチ」と呼ぶ。

² 「まとまりのある話」というのは、「ある特定のテーマについて、結束性を保ちながら展開し完結する談話」（工藤・藤森2009b：50）である。また、短い時間でまとまりのある話ができることは、学部・大学院での研究活動においてだけでなく、社会に出てからも必要とされる能力であると考え、1分スピーチを取り入れている。

なのか、具体的なスピーチと具体的でないスピーチは質的にどう異なるのか、そして、1分スピーチのような短いスピーチに求められる「具体性」とは一体どのようなものなのかといったことは明らかではない。現行の評価法の妥当性を検証する上でも、また、1分スピーチの指導法を考える上でも、これらの問いに答える必要がある。

そこで、本稿では、口頭表現試験において「具体的である」と評価されたスピーチと「具体性に欠ける」と評価されたスピーチの比較分析を通して、1分スピーチに求められる「具体性」とはどのようなものかを明らかにする。なお、本研究では、中級レベルの学習者が産出した、社会問題をテーマとする「問題解決型」の1分スピーチについて論じる。

2. 文献にみる1分スピーチの「具体性」

1分スピーチを扱った一般書には、冗長で主張や話の展開が明確でないスピーチを簡潔で論旨の明快なスピーチに変えるために必要な、情報の取捨選択と構造化の手法を中心に解説しているものが多い。1分スピーチについて、直接「具体性」という側面から解説しているものは見あたらないが、「具体」「詳細」といった表現を手がかりに見ていくと、「具体例を盛り込む」という手法が共通して取り上げられていることがわかる。例えば、下地(2013)は、企業における1分のプレゼンテーションでは、主張の理由を述べる際に、聞き手がイメージ化しやすい具体例をいくつか盛り込むことを奨励している。これは、「結論を示す(Point)」→「理由を述べる(Reason)」→「事例を挙げる(Example)」→「結論を繰り返す(Point)」という企業のプレゼンテーションで活用される「PREP法」と呼ばれる手法(大嶋2006)とも共通している。齋藤(2009)も、1分スピーチの自己チェックの項目として、「具体例はあったか」という項目を挙げている。

一方、日本語教育関係の教材では、1分間で内容豊かに話すことを目的とした1分スピーチの構成として、「テーマを示す」→「具体例を入れてわかりやすく話す」→「結論を述べる」→「スピーチを終える」が示されているが、ここでも「具体例を入れる」ということが挙げられている(黒崎2013:13)。また、1分という時間設定ではないが、山下(2001)は、効果的なスピーチの型の例を示す中で、「具体的には…ということがありました」「例えば、…がその良い例です」といった表現を用いて、「具体的内容」を盛り込むというポイントを挙げている。

これら文献に見られる記述から、一般に、1分スピーチでは、「具体例を盛り込

む」ことが内容をわかりやすくしたり豊かにしたりする上で重視されているということがわかる。

3. 分析データおよび分析方法

3.1 分析データ

本研究の分析対象としたデータは、2010年度～2012年度の秋学期³に1年コースで開講された「中級口頭表現」の履修生計107名の期末試験の1分スピーチのうち、A⁺評価のスピーチ22件と、「内容があまり具体的ではない」という理由でA評価となったスピーチ29件である。

期末試験は、「自国の環境問題」または「自国の人口問題」のいずれかのテーマについて、問題の「現状」「原因」「対策」を1分～1分30秒で説明する、問題解決型の1分スピーチである。このスピーチは、聞き手の心情に訴えることを目的としたスピーチや聞き手を説得することを目的としたスピーチとは異なり、事実に基づき客観的にその問題について説明することを目的としている。

学生は、秋学期の「中級口頭表現」の授業の中で、既に同じテーマで5～7分の口頭発表を行っており、試験のテーマおよび形式についても事前に知らされているため、スピーチの準備をして試験に臨むことができる。ただし、試験の際には、スクリプトやメモなどを一切見ることはできない。

1分スピーチは、内容・談話展開・デリバリーの3つの観点から設定された「A⁺・A・B・C・D⁴」の5段階で評価される。「A⁺」のスピーチは、「問題の現状・原因・対策が具体的に述べられ、話の展開もわかりやすい。話し方も流暢で、話すスピードや声の大きさも適切である。」というものである。「A」のスピーチは、「問題の現状・原因・対策が述べられ、言いたいことが十分伝わる。しかし、次のいずれかの問題がある。」というスピーチで、「内容があまり具体的ではない」「多少スムーズさに欠ける」「声が小さい」などのマイナスの評価項目のいずれかに該当するものである。問題の「現状・原因・対策」が述べられ、かつ、内容の具体性が評価基準に関わるのは、「A⁺」評価のスピーチと「A」評価のうち「内容があまり具体的ではない」という項目にチェックがついたスピーチである。したがって、本稿では、A⁺のスピーチを「具体的なスピーチ」、A評価のうち「内容があまり具体的でない」

³ 1年コースでは、春学期(初級)・秋学期(中級)・冬学期(上級)の3学期制で教育を行っている。

⁴ 2013年度より成績評価の制度が変わり、現在は「A⁺」は「S」、「D」は「F」となっている。

と評価されたスピーチを「具体的でないスピーチ」とみなし、比較分析を行う。

分析データの均質性を確保するため、「現状」「原因」「対策」の全てが述べられており、長さが1分～1分30秒のスピーチのみを分析対象とした結果、最終的なデータ数は、A⁺のスピーチ(=「具体的なスピーチ」)が22件、Aのスピーチ(=「具体的でないスピーチ」)が26件となった。なお、いずれの年度も、試験はほぼ同一の条件と評価基準のもとに実施されたものである。また、口頭表現クラスの教材⁵や課題、授業の進め方などもほぼ同じである。

3.2 分析の方法

2節で述べた通り、具体的に話すための手法としては、具体例を示す「例示」が最も一般的である。確かに、具体例を挙げることで内容に「具体性」が増すと見えよう。しかし、例示だけでは、本研究の分析対象である社会問題をテーマとした問題解決型スピーチにおける「具体的なスピーチ」と「具体的でないスピーチ」の違いを全て説明することは難しい。

そこで、1分スピーチの元になっている自国の環境問題・人口問題の口頭発表の指導において、どのような情報や説明を発表に盛り込むよう指導したのかということに着目し、4つの分析カテゴリを設定した。①具体例の提示、②データの引用、③用語の定義、④因果関係の説明、の4カテゴリである。これらは、主に、発表のアウトライン作成やレジュメ作成の際の留意点として取り上げた事項(工藤2010)に基づき設定したものである。以下に、各カテゴリの定義と共起する言語形式、発話例⁶を示す。

①具体例の提示

- 定義：一つないしは二つ以上の具体例を挙げて上位の概念を説明したり、問題の現状や原因、対策などを説明したりする箇所
- 共起する言語形式：「例えば」「～や～など」「～や～といったN」「～たり～たり」「～とか～とか」「いろいろ」「様々な」「さらに」「もう一つは」など

⁵ 2010年度～2012年度の「中級口頭表現」クラスで使用した教材は、工藤(2010)『アカデミックな口頭表現力を身につける 中級口頭表現』東京外国語大学留学生日本語教育センター(非売品)である。

⁶ 発話例は、文法や表現の誤用、言い直しなどはそのまま記述している。「、」は短いポーズを表す。

■発話例：

- ・[国名⁷]の森では、えー、意外かもしれませんが、ゾウやサイなど、いくつかの、えー、絶滅危惧種が生息しております。
- ・人口集中問題によって、様々な問題が今起こっています。例えば、人口減の村が増えていますが、[地名]では住宅が足りなくなっています。さらに、地方から移ってきた人々は、[地名]で仕事を見つけることが難しいので、うー、失業率が高くなっています。

②データの引用

■定義：統計データを引用して、問題の実情や程度を説明している箇所

■共起する言語形式：「～%」「～人」「～年」「～によると」など

■発話例：

- ・えー、実は、[国名]から、毎年1%の人口が流出します。
- ・その結果、2010年には2009年より、あー、汚染物質の量が2倍も減りました。

③用語の定義

■定義：用語の定義や意味について説明をしている箇所

■共起する言語形式：「Nというのは～(のことだ)」「～であるNは～」「Nという(修飾節)N」など

■発話例：

- ・「外来種」というのは、えーと、人間が、初めて[国名]に来た時に、えーと、連れてきた動物のことです。
- ・えっと、大気汚染の原因は何かというと、まず、×××という[国名]の昔の住宅、あとは、発電所とか、排気ガスとかいろいろあります。

④因果関係の説明

■定義：原因と結果の関係や現象の仕組みについて説明している箇所⁸

⁷ 個人の特定を避けるため、国名および地名は掲載しない。

⁸ 論理的に説明が成り立っていると思われる箇所のみコーディングの対象とした。

■共起する言語形式:「～ため」「～から」「～ので」「～によって」「～の結果」
「～せいで」「～おかげで」「それで」「～になる」など

■発話例:

- ・その家屋を暖めるために、主に、あ、石炭と木を燃やします。それで、その煙が、大気汚染の原因の60%となります。
- ・あー、このように(育児に)お金がたくさんかかるから、夫婦は負担を感じ、子どもを産まないようになりました。

分析の手順は、次の通りである。まず、各スピーチについて、下記の通り、スピーチの構成を特定し、A⁺とAのスピーチの構成について比較する。

【スピーチの構成】 ※表現形式の例は工藤(2010: 37)からの抜粋である。

- ① 「テーマ紹介」…スピーチの冒頭部でテーマを紹介する。
例)それでは、～について {お話しします/ご説明します}。
- ② 「現状」…その問題の現状や問題点について話す。
例)最近、[国名]では、～のような問題が出てきました。
- ③ 「原因」…その問題の原因や背景について話す。
例)その原因としては、A、B、Cなどが考えられます。
- ④ 「影響⁹」…その問題による影響について話す。
例)その結果、～や～といった問題が起こっています。
- ⑤ 「対策」…その問題の対策について話す。
例)この問題に対して、[国名]では、～や～などの対策をとっています。
- ⑥ 「対策の評価」…その対策の結果や問題点について話す。
例)こうした対策の結果、～に {なりました/なってきました}。
- ⑦ 「結論」…将来の予想や自分の考えについて話す。
例)将来は～になっていくんじゃないかと思われま
- ⑧ 「結びのことは」…発表を終わるときの挨拶
例)私の発表は、以上です。

⁹ 工藤(2010)では、「影響」という項目は設けられていないが、本項では、分析のために加えた。

次に、「結びのことば¹⁰」以外の各構成部における4カテゴリの出現状況をコーディングし、A⁺のスピーチとAのスピーチについて量的な比較を行った。さらに、A⁺とAのスピーチで量的に顕著な差が認められた項目について、談話データに基づく質的分析を行い、「具体的なスピーチ」と「具体的でないスピーチ」の質的な違いを比較した。

4. 分析結果

4.1 問題解決型の1分スピーチの構成

表1は、問題解決型の1分スピーチの構成についてA⁺とAを比較したものである。表の「件数」は、「テーマ紹介」「現状」「原因」「影響」「対策」「対策の評価」「結論」の各構成部が出現したスピーチの数を示す。スピーチによっては、「現状」「原因」「影響」の出現順序が異なるものがあるが、ここでは出現順序は問題にしない。また、1文の中で複数の構成部が出現するものについては、カテゴリが出現した構成部全てにおいてそれぞれ出現数を数えた。

表1 問題解決型1分スピーチの構成

構成	A ⁺ (22件)		A (26件)	
	件数	割合	件数	割合
①テーマ紹介	22	100.0 %	25	96.2 %
②現状	22	100.0 %	26	100.0 %
③原因	22	100.0 %	26	100.0 %
④影響	10	45.5 %	14	53.8 %
⑤対策	22	100.0 %	26	100.0 %
⑥対策の評価	16	72.7 %	21	80.1 %
⑦結論	12	54.5 %	16	61.5 %

A⁺とAのいずれのスピーチでも「現状」「原因」「対策」は100.0%で、「テーマ紹介」もほぼ100%の割合で出現している。また、「影響」「対策の評価」「結論」についても、Aのスピーチの方が多少出現割合が高いものの、出現傾向は共通してい

¹⁰ 「結びのことば」は、「以上です。」「私の発表は以上です。」など、スピーチの内容に直接関係がないため、分析の対象としなかった。

る。これらのことから、スピーチの構成という面においては、A⁺とAのスピーチに大きな差はないと言える。

4.2 スピーチの各構成部における4カテゴリの出現状況

各構成部における4つの分析カテゴリ（①具体例の提示、②データの引用、③用語の定義、④因果関係）の出現状況は、表2の通りである。各カテゴリの上段の数値は、各構成部においてそのカテゴリが出現したスピーチ数で、下段の数値は、A⁺スピーチ22件、Aスピーチ26件に占めるそれぞれの割合（%）である。

表2 1分スピーチの各構成部における4カテゴリの出現状況

*下段はA⁺スピーチ22件、Aスピーチ26件に占める割合

構成	①具体例		②データ		③定義		④因果関係	
	A ⁺	A	A ⁺	A	A ⁺	A	A ⁺	A
テーマ紹介	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 3.8%	0 0.0%	0 0.0%
現状	1 4.5%	1 3.8%	22 100.0%	15 57.7%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
原因	22 100.0%	18 69.2%	7 31.8%	1 3.8%	2 9.1%	1 3.8%	17 77.3%	11 42.3%
影響	9 40.9%	8 30.8%	0 0.0%	2 7.7%	0 0.0%	0 0.0%	4 18.2%	1 3.8%
対策	19 86.4%	11 42.3%	0 0.0%	0 0.0%	1 4.5%	1 3.8%	4 18.2%	0 0.0%
対策の評価	0 0.0%	2 7.7%	3 13.6%	1 3.8%	0 0.0%	0 0.0%	7 31.8%	2 7.7%
結論	6 27.3%	2 7.7%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
合計	57	42	32	19	3	3	32	14

A⁺とAのスピーチで顕著な差(30ポイント以上の差)が見られたのは、「現状」における「データ引用」、「原因」における「具体例の提示」および「因果関係の説明」、「対策」における「具体例の提示」である。「現状」の説明では、A⁺のスピーチの全てで統計データが引用されているのに対し、Aのスピーチでは、57.7%とデータ引用の割合が低い。「原因」の説明では、A⁺のスピーチの全てに一つないしは二つ以上の具体例が示されているが、Aのスピーチでは69.2%である。同様に、「因

果関係の説明」も、A⁺スピーチの77.3%に対し、Aスピーチは42.3%と低い。「対策」の説明では、A⁺スピーチの86.4%で具体例が示されているが、Aスピーチでは42.3%にとどまっている。A⁺スピーチとAスピーチにおけるこれらの差が、内容の「具体性」と密接に関わっていると推測される。

一方で、4カテゴリの中で、「用語の定義」は、A⁺とAともに3件のみであった。口頭表現の授業では、口頭発表の際には「砂漠化」や「出生率」などの用語の定義を説明するよう指導しており、実際の発表には、用語の定義を盛り込んだものが多い。しかし、分析の結果、1分スピーチの際には用語の定義は省略される傾向にあることがわかった。このことから、「用語の定義」は、1分スピーチにおいては内容の「具体性」を左右する要因ではないと言えよう。

4.3 スピーチ談話の比較分析

ここでは、表2で得られた分析結果が実際の談話データにどう現れているのか、顕著な差が認められた「現状」の「データ引用」、「原因」の「具体例の提示」および「因果関係の説明」、「対策」の「具体例の提示」について、A⁺スピーチとAスピーチを質的側面から比較する。

1) 「現状」の説明における「データ引用」

「現状」の説明において、データ引用のあるスピーチ(例1)とデータ引用のないスピーチ(例2)を比較すると、例1では、出生率低下の現状が統計データに裏付けられて客観的かつ正確に説明されているという印象を受ける。それに対して、例2では、どの程度「急速に」少子高齢化が進んでいるのか、その実情が正確に把握できない。

例1 [国名]は最近出生率が低下し続け、2010年、[国名]の統計院のデータによると、人口1000名あたり出生率が、わずか9.4人になってしまいました。[A⁺]

例2 [国名]では、日本より急速な人口、あ、少子高齢化が進んでいます。えと、そ、その問題の主な原因は、人々の考え方が変わってきたからだと思います。[A]

2)「原因」の説明における「具体例の提示」

「原因」の説明において、具体例の提示があるスピーチ(例3)と、具体例の提示がないスピーチ(例4)を比較してみる。例3では、都市に人口が集中する原因について、「仕事を探しに」「子どもの教育のため」という移住の目的の例を2つ挙げ、なぜ人々が都市に移住するのかを説明している。一方、例4では、都市への人口集中の原因を「移住」だとしながらも、どのような移住なのか、移住の目的や移住者のタイプについての例が挙げられていない。

例3 [地名]に人口が集中する理由は、その、仕事を探しに引っ越しする人や、子どもの教育のために引っ越しする人が多いからです。[A⁺]

例4 [国名]では、えー、都市に人口集中という問題があります。(略)
あー、その原因は、えー、原因は、都市への移住ということです。えー、都市へ来る人が増えています。えー、政府はその移住による悪い結果を防ごうと努力しています。[A]

なお、Aスピーチには、例5や例6のように、問題の原因として述べられている内容と現実の問題との間に直接的な関係性が見出せないものが5件あり、これらは「具体例の提示」としてコーディングしなかった。こうした論理的に飛躍した説明は、おそらく「具体的でない」だけでなく「わかりにくい」という印象を与えるのではないかと推測される。原因を説明する際には、問題と原因の関係について聞き手がスムーズに理解できるような説明が求められるであろう。

例5 あー、では、原因について、(森林破壊の)主な原因は、腐敗した、政治と経済です。だから、あー、経済のため、多くの資金はとりますけど、あー、環境のことはあまり考えられていません。[A]

例6 この問題(森林破壊)の原因は、国民による森林の破壊だと言われています。では、どうすればいいですか。[A]

3)「原因」の説明における「因果関係の説明」

「原因」の説明において、因果関係の説明があるスピーチ(例7)と、因果関係の説明がないスピーチ(例8)を比較する。例7では、大気汚染の原因である車の排気ガスがなぜ増えているのか、「外国からの車の輸入の増加」→「国内の車の数の

増加]→「車から排気ガスが出る」→「排気ガスが空気中に混じる」という因果関係の連鎖によってその仕組みが詳細に説明されている。それに対して、例8では、森林面積の減少の原因として、「貧困」「火災」「開発」という3つの原因が列挙されているが、「貧困」がなぜ森林面積の減少につながるのか、「火災」がなぜ起こり森林面積の減少につながるのかといった現象の仕組みが説明されていないため、結果的に因果関係が不明のままになっている。「原因」の説明においては、原因を列挙するだけでは不十分で、その因果関係についても言語化する必要があると思われる。

例7 なぜ、そんなことを起こっているかという、この、最近、[国名]に外国からたくさんの車を輸入されて、車の数が増えてきました。車を2台、3台持っている人も多くなりました。車から出される排気ガスが、空気中に混じり、酸性雨や質の悪い農業の原因となります。[A⁺]

例8 あー、この問題(森林面積の減少)の原因は、貧困、あー、火災、開発などの、あー、活動などです。あー、これ、この問題をなくすために、政府は、コミュニティフォレスト、ト、をつくりました。[A]

4)「対策」の説明における「具体例の提示」

「対策」の説明において、具体例が示されているスピーチ(例9)と具体例の提示がないスピーチ(例10)を比較すると、例9では、土壤汚染の「色々な対策」の具体例として、「ごみを分別して処理する」「農業地を改善する」「植物を使って土壤の重金属を除去する」という3つの対策が挙げられているのに対し、例10では、「色々な対策」の例が示されておらず、結果的に、どのような対策なのか、対策の中身が不明である。

例9 それ(土壤汚染)に対して、色々な対策がとられています。ごみを分別して、処理したり、農業活動に使った土地を改善したり、植物を使って、重金属を除去したりなどの、対策です。[A⁺]

例10 それ(ゴミ問題)に対して、ん、それに対して [国名] の政府は、日本の JICA と協力して、んー、協力して、色々な対策を行っています。しかし、この対策は、狭い範囲にわたって実施されていると言われています。[A]

ちなみに、例10に見られるような、具体例を伴わない「色々な」「様々な」の使用は、A⁺のスピーチでは2件のみであるが、Aのスピーチでは9件に上り、そのうち8件が「対策」に集中している。これは、時間内にスピーチを終わらせようという意識から、「対策」の説明を急いだ結果ではないかと推測される。問題解決型の1分スピーチでは、スピーチ全体の時間配分を考えながら、「現状」「原因」「対策」についてバランスよく話すことが求められていると言えるであろう。

5. おわりに

本研究では、中級レベルの学習者が産出した問題解決型の1分スピーチについて、量的側面と質的側面から、「具体的なスピーチ」と「具体的でないスピーチ」の比較分析を行った。その結果、社会問題をテーマとした問題解決型の1分スピーチでは、①「現状」の説明でデータを引用する、②「原因」の説明で原因の具体例を提示し、現象の因果関係を説明する、③「対策」の説明で対策の具体例を提示する、ということが内容の「具体性」を決定づける要素として機能していることがうかがえた。これは、本研究の分析対象のようなアカデミックな1分スピーチでは、「具体的に話す」ということが、単に具体例を挙げるということだけではなく、データ引用によって「客観的・正確に話す」、因果関係や仕組みの解説によって「物事の関係性を示す」といったこととも密接に関わっていることを示唆していると言えよう。これらの知見は、「具体性に欠ける」という印象を受けるスピーチのどこに問題があり、どうすればより具体的なスピーチになるかといったことを分析的に診断し、学習者にフィードバックしていく上で有用であると思われる。

本研究では、4つの分析カテゴリを設定して1分スピーチの比較分析を行ったが、今回の分析では、内容を掘り下げたり説明を補ったりすることで「具体性」を高めるような談話展開までは分析できなかった。今後は、より質的な面から、「具体性」を高めるための談話展開のあり方についても明らかにしていきたい。

付記

本稿は、第40回日本語教育方法研究会(2013年3月10日 於:東京大学)における同題目の研究発表の内容に、分析結果の修正も含め、大幅に加筆・修正したものである。

引用文献

- 大嶋友秀 (2006) 『PREP 法で簡単に身につく論理的に「話す」技術』日本実業出版社
- 工藤嘉名子・藤森弘子 (2009a) 「初級 1 分スピーチの産出にみるモデル提示の作用」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第 35 号、pp.47-62
- 工藤嘉名子・藤森弘子 (2009b) 「初級からのスピーチ指導—まとまりのある話ができるために—」『日本語教育方法研究会誌』16 (1)、pp.101-110
- 工藤嘉名子 (2010) 『アカデミックな口頭表現力を身につける 中級口頭表現』東京外国語大学留学生日本語教育センター
- 工藤嘉名子 (2011) 「口頭表現指導における実践と JLC スタンダード—初級・中級レベルの評価法を中心に—」『報告書 世界的基準となる日本語スタンダードの構築』東京外国語大学留学生日本語教育センター、pp.180-185
- 黒崎典子編著 (2013) 『もっと中級 日本語で挑戦！スピーチ&ディスカッション』凡人社
- 齋藤孝 (2009) 『1 分で大事なことを伝える技術』PHP 研究所
- 下地寛也 (2011) 『コクヨの 1 分間プレゼンテーション』中経出版
- 安田正 (2007) 『誰でも論理的に話せる ロジカル・コミュニケーション』日本実業出版社
- 山下暁美 (2001) 『スキルアップ 日本語表現』おうふう

What is the “Concreteness” Required for A One-Minute Speech? — In Case of Problem-Solution Speech —

KUDO Kanako

This research was conducted for the purpose of determining the “concreteness” that is required for a persuasive one-minute speech with “problem-solution” structure. In order to illuminate actual differences between concrete speeches and non-concrete speeches, four analytical categories were employed for comparison: (1) giving concrete examples; (2) citing statistical data; (3) giving a definition of a term; (4) indicating the cause-effect relationship.

Twenty-two concrete speeches and twenty-six non-concrete speeches produced by intermediate learners of the Japanese language were compared using the above-mentioned four analytical categories. From both quantitative and qualitative analyses, the following factors were identified as the keys to determine the “concreteness” of problem-solution one-minute speeches on social issues: (1) citing statistical data to show the present situations of the problem; (2) giving concrete examples and indicating the cause-effect relationship to explain the causes of the problem; (3) giving concrete examples to show the measures for the problem.

These results indicate that in an academic one-minute speech, “concreteness” is closely related to speaking objectively or precisely and to illustrating the relations among matters.